

## ■ 2020 年度全国研究発表大会受賞者の紹介

経営情報学会では全国研究発表大会にて、各賞を受賞された研究者の表彰式を行っています。2020 年全国研究発表大会では、学生発表において 17 組の発表があり、5 組の若手研究者達が表彰されました。学生優秀発表賞に輝いたのは、佐々木誠治さん(岩手県立大学大学院)・後藤裕介さん(岩手県立大学)、菊池百々帆さん(東京理科大学)・大江秋津さん(東京理科大学)、坂本将磨さん(東京工業大学)・仙石慎太郎さん(東京工業大学)、小林秀二さん(東京大学)、白石梨紗さん(東京理科大学)・大江秋津さん(東京理科大学)の 5 組でした。今回は、受賞された方に今の心情や研究での工夫や苦労した点、今後の展望について執筆していただきました。若手研究者の皆さんにとっては大変参考になる部分も多いと思われます。今後の発表に積極的に活用してください(所属は 2020 年 11 月 7 日当時のものです)。

学生優秀発表賞 受賞発表一覧(敬称略)

○印の方が発表者となります

○佐々木誠治(岩手県立大学大学院)、後藤裕介(岩手県立大学)

「店舗利用波及効果を考慮したマーケティング資源の最適化手法の提案」

○菊池百々帆(東京理科大学)、大江秋津(東京理科大学)

「URA の経験の多様性が生む大学発ベンチャーに関する実証研究」

○坂本将磨(東京工業大学)、仙石慎太郎(東京工業大学)

「企業関係に基づく株価変動の予測性：通常時とコロナ・ショック時の比較」

○小林秀二(東京大学)

「残余利益 CAP モデルによる競争優位期間と無形資産価値の測定」

○白石梨紗(東京理科大学)、大江秋津(東京理科大学)

「認知バイアスが明治日本の評価体系にもたらす影響—お雇い外国人のハロー効果に関する実証研究—」

フォーラム誌編集委員会

## 店舗利用波及効果を考慮したマーケティング資源の最適化手法の提案

佐々木誠治(ささき せいじ)

岩手県立大学大学院

### 1. はじめに

このたびは、学生優秀発表賞をいただき、大変光栄に思います。本研究にご協力いただいた関係者の方々、また発表の際にご助力や深い議論をしていただきました諸先生方および参加者の皆様に深く感謝申し上げます。

### 2. 研究概要

複数のテナントを抱えるデパートやショッピング

センターなどの商業施設においては、単一店舗の利益だけでなく、商業施設全体の利益向上が重要となります。そのためには、全体利益が大きい見込み顧客の選別が必要となります。また、顧客管理において、見込み顧客の獲得・選別・育成の 3 つの活動が行われており、見込み顧客の育成を行うためには、深い顧客理解が必要です [1]。

本研究では、複数のテナントを持つ商業施設や EC サイトを対象として、プロモーションを行う際のマーケティング資源の最適化手法を開発しました。この手法を用いることで、優先的にプロモー

ションを行うべき店舗や有望な見込み顧客を抽出し、店舗来店に関わる顧客の特徴を理解することが可能となります。また、モデル構築において、他店舗利用状況変数を取り入れることにより、モデルの精度の向上やより深い顧客の特徴理解が可能になります。これにより、商業施設が店舗支援を検討する際に、店舗・顧客のスコアやその店舗を利用する人の特徴を参考にして意思決定ができるようになります。

### 3. 現在の研究状況と今後の研究計画

今回の発表では、複数のテナントを抱える商業施設の購買履歴データに本提案手法を適用し、顧客や店舗に対して分析を行った結果を報告しましたが、商品においても同様に、本提案手法の適用が可能であると考えています。

現在は、今回発表した内容をもとに、論文投稿に向けた再計算、再分析に取り組んでいます。また、波及効果のスコアを用いることによって、テナントミックスの検討に活用できる可能性の検証を試んでいます。

### 4. おわりに

本提案手法は、波及効果の観点から顧客や店舗を評価することを可能とするものです。本研究を参考に日本での波及効果指標の研究が進み、マーケティング戦略の発展に少しでも繋がれば幸いです。

### 参考文献

- [1] 伊藤克容「マーケティング管理会計の展開—顧客動向の追跡と動線設計—」『管理会計学』第26巻、第2号、2018年、pp. 31-46.

## 挫折を共に乗り越えた URA に関する実証研究

菊池百々帆 (きくち ももほ)  
東京理科大学経営学部経営学科

### 1. はじめに

この度は、学生優秀発表賞をいただき光栄に思います。私としては、人生で初めての学会出場、初めての口頭発表、初めてのオンライン形式(図1)、そして初めての受賞となり、一生忘れられない学会となりました。研究を進める際や発表の際に指導し

てくださった、大江先生をはじめ、大江研究室のゼミ生の皆さんに深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

### 2. 研究概要

この研究の目的は、URA (リサーチアドミニストレーター) が大学発ベンチャーに与える影響を実証することです。

リサーチアドミニストレーター (URA) は、研究者の研究活動を活性化させるための研究マネジメント人材 (文部科学省) として位置づけられており、そのほかにも外部研究費の獲得やコンプライアンス対応、産学連携などの業務を担当しています (高橋・北澤, 2010)。

この研究から、URA の数、前職の多様性、長期雇用者の割合、研修制度が大学発ベンチャーの数に効果があるということが分かりました。また、それぞれの交互作用を見た際、前職の多様性や長期雇用者の割合が高い場合、大学発ベンチャー数増加に対

### 20. 交互作用効果 (モデルⅧ)

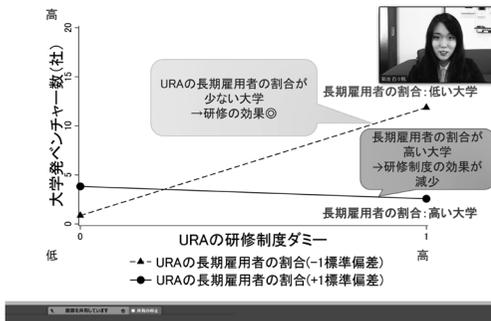


図1 オンライン形式での発表風景

する研修制度の効果が減少していることが分かりました。研修制度は、人・時間・資金などのコストがかかるものであるため、新入職員や経験の浅いURAに対する研修に注力すると効果的であると考えられます。

### 3. 現在の研究状況と今後の研究計画

現在は、これまでの研究を踏まえて、テキストマイニングを使い、言葉と言葉の関係性やそこからどのようなことが効果的なのか、何が核となるかを見出しています。

今後は、上記で分析手法を活用したうえで、組織の知識のネットワークについて分析したいと考えています。そして、いつか大江先生のように、経営学の「萌芽」となるような研究に結びつけたいです。

### 4. 最後に

私は、2019年の8月から2020年の8月末までア

メリカのサンタモニカカレッジに留学する予定でした。しかし、新型コロナウイルスの影響で、アメリカにいたことが困難となり、途中帰国を余儀なくされることになりました。留学生生活を全うできなかったという一種の挫折を経験し、人にも会えない状況下で自信を失っている毎日でした。しかし、研究を進めていく中で、知らないことを知る喜びや達成感を得ること、そして多くの人と交流することができました。留学中から今回の研究に至るまで、見守り、指導してくださった大江先生、時間を惜しむことなく教えあい、心の底から励ましてくれたゼミ生に本当に感謝しています。本当にありがとうございました。

### 参考文献

高橋宏，北澤宏一「米国におけるリサーチアドミニストレーターの役割と我が国への導入方策」『年次学術大会講演要旨集』第25号，2010年，11-14ページ。

## 企業関係に基づく株価変動の予測性： 通常時とコロナ・ショック時の比較

坂本将磨（さかもと しょうま）  
東京工業大学

### 1. はじめに

この度は光栄にも経営情報学会2020年全国研究発表大会で学生優秀発表賞を頂戴した。本学会の発表大会では、社会への還元や、新規性が高い萌芽的研究が多数あり、聴講者としても大変有意義な学びとなった。感染症対策の状況下のためオンライン上での開催であったが、情報通信技術（ICT）を活用した急激な社会変革の経過と今後を考えるうえで非常に貴重な経験となった。本研究の指導にあられた先生方、また当該研究室の皆様、発表の際にご意見やご助言をいただいた先生方、ご参加いただいた皆様に深い感謝の意を表する。

### 2. 研究概要

新型コロナウイルス（COVID-19）感染症に伴うパンデミックは、現在（2020年12月時点）においても終息の目処がたっておらず、世界経済への影響は増すばかりであり、株価も暴騰や騰落といったボラティリティの高い状況が続いている。日本も同様であり、2020年3月に日経平均株価は記録的な暴落を記録した（コロナ・ショック）。その後、COVID-19感染症の拡大を予防しながらも各国は経済対策を実施し、COVID-19ワクチン開発の報道も相次いだ。同年11月に米国のダウ平均株価は、史上最高値を示し、日本も同様の高値を示した。その一方で、欧米各国は感染が再燃、日本の感染者数も徐々に増加し、過去最大の1日当たり感染者数を示している。

COVID-19 感染症の終息の見通しは不透明であるとともに、株価への影響も引き続き継続することが予想され、株価変動を予測することは今後の経済動向を予測する方策を考えるうえで重要である。株価予測の方法の1つに企業間関係に着目した方法がある。取引関係のある2つの企業の供給側（サプライヤー）か顧客側（カスタマー）のどちらかに株価変動が生じると、もう一方の企業にも株価変動が波及することが示されている。この企業間関係に基づく株価予測の有効性は、コロナ・ショック時のようなボラティリティが高い相場での検証はなされていない。

本研究では、上述の課題認識のもと、日本の株式市場において、通常時とコロナ・ショック時との間で、企業間関係に基づく株価変動の予測性がどのように変化するかを検討することを目的とした。研究方法は、日本の株式市場において、2015年6月から2020年6月までの5年間の終値を対象とし、企業間関係に基づく株価変動を日次ベースで予測した。加えて、2020年2月から6月をコロナ・ショック時と定義し、通常時とCOVID-19感染期間中における株価の予測性の変化を検証した。具体的には、日本の株式市場に上場している企業の有価証券報告書を用いて、サプライヤー企業とカスタマー企業の対を抽出し、一方の企業の株価変動がもう一方に及ぼす影響度を調査・分析した。結果、日本の株式市場における日次ベースの株価予測は有意であること、コロナ・ショック時の株価変動の予測性は、通常時と比較して保有日数をX日と仮定した場合の取引成績を表す $\alpha$ 値が大きく、株価予測性の有効性が高いことが示された。特に、カスタマー企業の株価変動、下降イベントであること、及び取引企業が大企業であることが、株価変動に大きく影響し、株価予測の有効性が高いことが示された。

以上の知見をもとに、日本の株式市場における企

業間関係に伴う日次ベースの株価予測の有効性がコロナ・ショック時にも有効である理由とその特徴を明らかにし、今後の日本の経済変動の指標や株価を予測するための新たな方法論として有効である可能性を示した。

### 3. 研究状況と今後の研究計画

本研究では、コロナ・ショック時という極めて極端な株価変動の時期に焦点を当てて調査しており、世界的に見ても終息の時期は不明であるため、コロナ・ショック時の期間の定義が限定的である。コロナ・ショックが終息してから全期間通しての有効性の検証や、他の事例に基づくさらなる検討の必要性がある。

本研究の知見の1つであるコロナ・ショック時の下降イベント、カスタマー企業かつ企業規模が大きい企業のイベントが株価予測性に有効であるという結果について、その要因を体系的に、複数の要因に絡めて見出すことが、企業間関係における株価予測性の有効性を高める新たな指標につながる可能性がある。その方法としては、多数の因子を検証する重回帰分析での検証や、深層学習での精度の高い株価予測式の作成が有効的な検討方法として考えられる。

最後に、私の所属している東京工業大学の技術経営専門職学位課程は、各所から多種多様な人材が集まり、日々技術経営学を学びつつ、学生それぞれが興味を持ったテーマを選択し研究を行っている。そのため、研究室で一貫した研究テーマを代々引き継ぐことは必ずしも要求されず、研究テーマを自ら選定し、結論を導き、完結させる必要があった。今後は、修了までの残された時間を活用し、研究の精度を上げ、国際誌への論文投稿を目標に尽力していく。

## ストレンジ博士課程：

# または私は如何にして心配するのを止めて研究を愛するようになったか

小林秀二 (こばやし ひでじ)  
東京大学大学院工学系研究科

### 1. おじさん受賞の喜び

この度は、このような賞に選んでいただきましてありがとうございました。私は最近大学に入り直した者で、賞の趣旨に若干外れるかもしれませんが、対象に加えていただき感謝しています。

仕事の都合で日曜日の発表を希望したところ、「賞の対象になりますよ」とスタッフの方に提案していただきました。そのおかげで賞の対象になりました。昨今は団塊の世代の先生方が定年を迎え、どの学会も会員数が減少していると聞いています。そうした中で当学会のこうした広い心はシニア世代の励みにもなるだろうと思います。また私自身ダイバーシティに少しばかり貢献できたのではと喜んでいます。

初めて大会に参加してまず感じたのは、多くの若い学生が高度な研究成果を立派にプレゼンしている姿です。自分の若いときと比較するとその違いに驚き、また本当に素晴らしいことだと思いました。指導教員の皆様の熱意が行き届いているのだと感じます。

### 2. 研究の様子

私は東京大学先端科学技術センターの先端学際工学専攻（博士課程）の院生です。本業はインベストメントと戦略系の経営コンサルタントなので文系から理系へ転じたと言ってもいいかもしれません。実務家のかたわら野良（ノラ）の研究者であったのですが、限界を感じて大学に入れてもらったわけです。

東大では関本研究室に所属しています。以前、航空研究所があった駒場Ⅱ（駒場リサーチキャンパス）の中にあります。このキャンパスは東大の外れにあります。先端研というだけあって周りはエッジが効いている研究室ばかりです。新しい物事は辺境から生まれると思っていますので私は気に入っています。毎年6月頃にはリサーチキャンパス公開と



いうイベントが開催されますので、ぜひ遊びに来てください。

指導教官である関本義秀教授が空間情報科学研究センター、生産技術研究所、工学系研究科社会基盤学専攻、先端学際工学専攻を兼任されており、メンバーは社会のさまざまなテーマに幅広く取り組んでいます。データ・サイエンスの中でAI、GIS、シミュレーションなどを活用する研究が多いようです。また、留学生が多いので英語が公用語になっています。このような中に入れていただき、毎日が刺激的な研究環境になっています。

### 3. シンプルでワクワクがいいね

予稿を見ていただければわかりますが、私の研究に難しい数式はなく、凝った統計手法を使っているわけではありません。あえてそういうことを避けたというのが正直なところ。それは自分の反省も含め、そういう研究は読んででももらえず、技術的な

揚げ足取りばかりで大事な論点がズレ、結局のところ何も残らないと痛感していたからです。大学教員としての実績を挙げるには必要なことですが、幸いなことに私はそういうことを気にする必要がない立場です。

それよりもシンプルな方法論をとり、既存文献を読み込み、複数のディシプリンを横断的に行き来し、専門知識を自分なりに積み上げ、また特に業界（ドメイン）知識を調べ、丁寧なデータ収集と加工を行おうと思った次第です。1ミリでも新規性があるのか、研究者にも示唆を与えられるか、直観的に理解されるわかりやすさか、ビジュアルで伝わるか、実務に役立ちそうか、将来実際に使ってもらえることができるか、が自分なりの判断基準でした。

私の研究は、こうしてコツコツと知識を積み上げて面倒なデータ整理ばかりをやったわけですが、分析に入るとああでもないこうでもないと関係を調べたり、グラフを作ったりするのは楽しく至福の時間となりました。単純なグラフでもこれまで見たことのない結果が出てきて本当にワクワクしました。正直、どこにも発表せずに自分だけのものにしようと思ったくらいです（今でも半分はそう思っています）。こうしたゆっくりと集中した時間が許されない時代ではありますが、若い学生の方々にはこうした楽しさを味わってもらいたいと心底思っています。

#### 4. 研究のモチベーションは“心配”

私の、研究分野は「メタ知識学」「知のインフラストラクチャー」というべきもので、研究対象は広く「知識社会・デジタル経済」で目に見えない触れないものだけです。現在の研究テーマは「知的資本の形成とスピルオーバー」です。アイデアやイノベーションがどう起きるか、どのように波及するか時空間の構造を検証し、企業の知識経営等に役立たせたいと考えています。本研究「Residual income CAP model to measure competitive advantage period and intangible asset value（残余利益CAPモデルによる競争優位期間と無形資産の測定）」は、無形資産の価値評価を扱っています。まずは、アイデアがどう結実しているか後ろから確認したかったわけです。

元を思い起こせば、少しばかり長く生きている私にとって「みんなは何をどうやって食っているの?」「今後、どうやって生きていくの?」「みんな真面目に働いているのになぜ苦しいの?」という心配とギモンから来ています。

私は地方出身ですが、東京での仕事や生活はもちろん、地元の同級会や冠婚葬祭、地域イベントに行っても（年配者を除けば）農業や製造業で生活している人など会ったことがありません。ところが、イノベーションや無形資産となるとどうしても製造業、中でも医薬品や電機産業の話になっていました。

私の研究は、全産業対象にしていますので、これまで得られなかった研究開発費などない対人サービス業、地味なビジネス向けサービス、新しいネットサービスなども対象にしたことも面白い点であると思います。働いている人みんなに関係するということです。これによって生産性向上（スマートに働くこと）につながればいいと願っています。

私には子供が2人いるのですが、これも心配の種類です。将来楽しく生きるために、今何をがんばっておけばよい?ということがわかったら子供世代に知識として伝えたいと思っています。「授人以魚不如授人以漁」ですね。これが私のモチベーションになっています。

#### 5. 無形資産が重要ということ

現代の企業経営で無形資産は非常に重要になってきています。しかしその価値測定は難しいと思います。現状は、メーターもなく運転している状態です。もし無形資産やその価値測定の話が出たら、私の発表を思い出してください。まだ論文として掲載されたわけではありませんが、いろいろなところに書いていくのでは非読んでいただきたいと思います。

今回の分析でたいへん多くの結果が出たのですが、大量すぎて泣く泣く削除しました。それでも論文3本分になり、今回さらにダイジェストにして1本にまとめ発表しました。予稿はさらにそれを4ページにしたところでした。ですから15分ではとても足りず、2時間はしゃべりたいくらいでした。もし基礎から説明するなら半期の授業が必要でしょ

う。ですから、この凝縮された予稿 PDF を読んで  
も細かいところはわからないかもしれません。また  
別の機会があればじっくり説明していきたいと思  
います。

## 6. 次の研究は (たぶん)

私の次の研究は、これらの (オフバランスの) 無  
形資産、あるいは超過利益がどのように形成され  
るかです。必ずしも投下したお金に対応していな  
いことはわかっていますがナゾです。先行研究の  
とってある会計のように単純一律に償却する方  
式は、個別企業としてもマクロ政策としても見  
誤る危険があると考えています。

さらに新型コロナは無形資産にどのような影  
響をしたのかも行う必要があります。全体の株  
価はあまり変わっていませんが、産業別の優  
劣は変わったと思われ。産業構造や仕事の仕  
方も大きく変わるので、学生のみなさんの  
就活の考え方も大きく変わらなければいけ  
ないと思います。

実はもう一つ平行してハッカソン、シビク  
テックなど地域のイベント・コミュニティも  
分析中です。

知の伝達として、オープンソースやオープン  
イノベーションに関心があるからです。関本  
研は、ワークショップやアーバンデータ  
チャレンジなども積極的に開催しています。  
これも面白いデータが出ていますので次  
の大会等で発表できたらと考えていま  
す。

最後に今後の研究手法についても考える  
ところが

あります。特に社会的な研究は、演繹的な  
モデリングだけでは足りず、実際に効果  
が上がっているのはアブダクション的  
なアプローチであり、依然として因果  
推論が議論されます。最終的にはビ  
ジネスや政策の意思決定に使うこと  
が暗に了解されているからです。実  
務の現場ではビッグデータや AI など  
帰納法的な技法が主流になってきて  
大活躍していますが、理論的背景の  
少なさに私のようなオジサンは居  
心地悪さを感じてしまいます。加  
えてブラックボックスでは責任が  
果たせないのでは？というオト  
ナの事情もあります。

今回、私は「逆問題」を使いましたが、  
第三の方法論としてシミュレーション  
をもっと活用すべきと考えます。  
これらを一人で全てやることは不  
可能ですがチーム等で相互補完で  
できれば最高だと思います。研  
究者自身も知の共有や集合知の  
実践が必要というわけです。私に  
とって本学会がそういう協働が  
できる“場”になればいいと思  
います。

## 略歴

### 小林秀二 (こばやし ひでじ)

hideji@u01.gate01.com

東京大学大学院工学系研究科先端学際工学専攻博士  
課程。不動産金融工学研究所代表。一般社団法人  
コード・フォー・ジャパン社員。FM 局「渋谷のラ  
ジオ」ディレクター (非常勤)。1962 年山梨県八代  
町 (現笛吹市) 生まれ。株式会社 CSK (現 SCSK)  
などを経て現職。不動産鑑定士、CISA (米国公認  
システム監査人)。

## 令和の環境変化と明治維新 —オンライン学会を終えて—

### 1. はじめに

この度は、学生優秀発表賞に選出いただき、誠に  
ありがとうございます。

まず、研究へのご指導をくださった大江先  
生、質疑応答や懇親会において貴重なフィードバ

ックをいただきました先生方ならびに参加者の皆様  
に厚く御礼申し上げます。そして、COVID-19 の流  
行というイレギュラーな状況下で、学会という貴重  
な場を絶やさず設けてくださった皆様に、深く感謝  
申し上げます。

先年に引き続き受賞させていただいたことで、研

究に対して更に気を引き締めて取り組もうと決意を新たにしました。

## 2. 研究概要

「認知バイアスが明治日本の評価体系にもたらす影響—お雇い外国人のハロー効果に関する実証研究—」という表題で発表いたしました。昨年度が「お雇い外国人全体の傾向」を見た研究であるとするならば、今回は「ハロー効果の研究」という異なる視点から研究しました。

認知バイアス理論において、ハロー効果という、対象のある特性を基準とした評価が、人や物の全体的な評価に影響をもたらす傾向 (Nisbett and, 1977) があります。これにより、例えば有名大学の技術は、技術力に関わらず、他の大学に比べてライセンスを得やすい (Sine and Gregorio, 2003) 等の利点があります。しかし、この研究では、この効果によって評価者が持つ「高い期待」による評価に着目し、統計分析を行いました。すると、学歴や業績によって高い期待を持たれると、雇用継続にならず、逆に、低い期待下では長続きしやすいという結果が出ました。この結果は、ハロー効果の有害性を指摘した点が面白く感じました。また、当時のお雇い外国人のようにジョブ型に切り替わる現代において、期待をされなくとも高みに挑戦し続ける重要性を感じました。

今回の研究では、主に三つの挑戦をしました。

一つ目は、理論の選択です。当時のお雇い外国人の情勢を読み、現代と照らし合わせ、どの理論を選択するか考えました。当初はアイデアが先走り、読んできた理論を全て取り込み実証したいという思いに駆られました。しかし、指導を受けるにつれ、一つに収束させ、集中する大切さを痛感しました。

そして、データを加えるという挑戦を行いました。今年度は佐藤様にいただいたデータに加え、新たに書籍よりデータを収集いたしました。完璧でない OCR 文字認識機能の結果に加え、例えば、既に持ち合わせているデータと新規データの綴りが違う (例: ジョージとデジョージ, イトキなど) という、数々の明治時代の資料ならではの大変さがありました。文字の置換や検索項目の工夫などで対処しました。

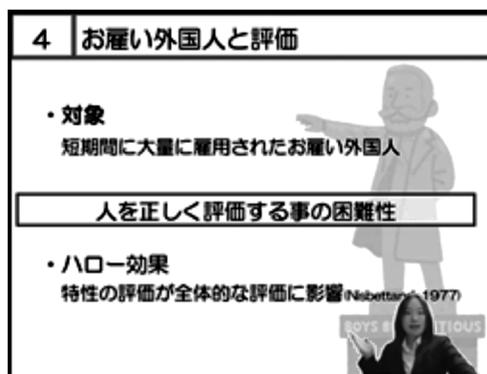


図1 発表練習の様子

三つ目が、口頭発表への挑戦です。当初は、昨年度の学生発表のように、ポスター発表をするつもりでいました。しかし、新しい様式の学会発表において、口頭発表という機会ができ、それに挑戦したいという学会初挑戦の同輩や後輩から刺激を受け、挑戦を決めました。与えられた15分は、ポスター発表の5倍です。しかし、ポスターと違い、質疑応答の時間が短い故に、15分で伝えきらなければならないという難しさがありました (図1)。

挑戦を振り返り、常に選択と集中を求められたと感じています。これらを新しい様式で、以上のことを行えたことは、とても意義深かったと考えています。

## 3. 新型コロナウイルス流行下での研究発表

新型コロナウイルスが流行し、我々の生活は大きく変化しました。普段であれば、研究室で綿密に切磋琢磨しながら行う研究ですが、昨今の情勢でそれが叶わなくなりました。そこで、私たちの研究室ではバーチャル研究室を使用しました (この原稿も、そこで話しながら書いています)。これを使用することにより、オンライン上でのやり取りが「連絡」から「交流」に変わりました。研究でも「バーチャル研究室における学生間交流の活発化は、研究室全体の一体感をもたらす、更に研究意欲につながった」(國本・大江, 2020) という結果が出ています。私はまさにその恩恵を受け、交流を深めることにより、先輩、同輩、後輩に支えられる機会が沢山ありました。そして、秋の経営情報学会に出すという研



▲バーチャル研究室

研究室の共通目標があったことが、研究室全体のマインド向上につながったのではないかと考えています。

この先の見えない状況がいつまで続くかは分かりません。だからこそ、明治大正のペスト騒動を乗り越えてきた経験など、歴史の教訓の重要性を思い知らされます。例えば、衛生環境の研究・発展に尽力した北里柴三郎氏はオランダ人の医師であるマンズフェルトから学び、内務省衛生局に勤めたのち、国費でドイツ留学を行いました。大変な状況の下でも研究を続けた先人を見習い、学び続け、研究の火を絶やすまいと試行錯誤し続ける試みは、この状況が終わってもなお生き続けてほしいと願っています。

#### 4. 研究状況と今後の研究計画

現在は、卒業論文に向けてデータの補強に取り組んでいます。卒業論文では、前年度に発表した先述の通り、明治時代のデータの照合は、さまざまな困

難性があります。元のデータに比べ、一致した数・データ分析が可能な件数はとても少なくなりました。しかし、更にデータが取れます。名称を高い精度で一致させ、更に変数を加えることにより、より深い分析もできるのではないかと考えています。

合わせられなかった分、特に、船員職のお雇い外国人のデータ一致に努めます。

これから私は大学を卒業し、就職します。その際は社会人として新しい観点も踏まえたご報告をお見せできれば嬉しいです。

#### 参考文献

- [1] Nisbett, R. E., and Wilson, T. D., "The Halo Effect: Evidence for Unconscious Alteration of Judgments," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 35, No. 4, 1977, p. 250.
- [2] Sine, W. D., Shane, S., and Gregorio, D. D., "The halo effect and technology licensing: The influence of institutional prestige on the licensing of university inventions," *Management Science*, Vol. 49, No. 4, 2003, pp. 478–496.
- [3] 白石梨紗・大江秋津「明治初期の社会が求めた知識の多角的な価値に関する考察」『経営情報学会全国研究発表大会要旨集 2019 年秋季全国研究発表大会』2019 年。
- [4] 國本真悠子・大江秋津「バーチャル研究室における錯覚が学生の研究意欲にもたらす影響」『経営情報学会 2020 年全国研究発表大会要旨集 2020 年全国研究発表大会』2020 年。
- [5] 学校法人北里研究所北里柴三郎記念室『北里柴三郎の生涯』, <https://www.kitasato.ac.jp/jp/kinen-shitsu/shibasaburo/lifetime.html>